

ASD 児へのソーシャルスキルトレーニングに関する実践研究

～小集団のメリットを活かしたかかわり～

○氏家享子

(東北福祉大学特別支援教育研究室)

KEY WORDS: ASD、ソーシャルスキルトレーニング、小集団

I 目的 行動のセルフコントロールが難しいために家庭や学校で対人面のトラブルを抱える ASD 児を対象にソーシャルスキルトレーニング（以下 SST）を行った。行動のセルフコントロールに主眼をおいたプログラムではなく、指導者と ASD 児同士のかかわりが促されるよう、小集団ならではの関係作りができる SST プログラムを実施し、効果的なかかわりのあり方について考察した。なお、研究発表する事については事前に保護者に書面をもって説明し承諾を得ている。

II 方法 1) 対象児童

小学校 4 年生、5 年生の ASD 児 4 名（男児）を対象に、20XY 年より約 2 年間、合計 30 回 SST を実施した。4 名のうち、変化の顕著だった 2 名（A 児、B 児）について報告する。A 児、B 児ともに家庭や学校で自分の行動のコントロールがうまくできず、暴力や暴言がみられていた。

2) 実施内容

1 回のセッションは 1 時間で、始まるの会（5 分）→導入（簡単な運動やゲーム等 10 分）→ゲーム①（20 分）→ゲーム②（20 分）→終わりの会（5 分）の順に毎回実施した。活動内容は、30 回を IV 期にわけて計画を策定し、I 仲間関係を作る（10 回、ゲーム例：他己紹介、自作すごろく）II 仲間と協力する（12 回、ゲーム例：ウォークラリー、ペアでクイズ）、III 仲間と共同作業をする（5 回、ゲーム例：空想怪獣を描く）、IV 話し合いをし自分たちで活動内容を決める（3 回、ゲーム例：時間だけ提示し、やりたいゲームを話し合い実行する）という計画のもとに実施した。活動中、指導者はできるだけ児童の意見に耳を傾け、やりたいゲームやルール変更があればその場で取り入れたり、やりたくないときにはお休み席にいてもよい事、活動ペースが早い児童には別な活動を付け加えるなど、児童が自主的に考え自分のペースで過ごしながらかかわりを持てるよう配慮した。

3) 効果の分析方法

分析方法は、SST 活動内での児童の様子の記録と、保護者からみた児童の評価を分析し変化をまとめた。保護者からみた児童の評価については、上野・岡田（2006）の「指導のためのソーシャルスキル尺度」のチェック表（15 点満点、平均は 10±3）を用いて、指導前後に保護者が回答した結果を比較した。更に、指導開始 1 年後（以下、指導中と示す）、2 年後（以下、指導後と示す）の 2 回、記述式アンケートに家庭と学校での児童の様子について、良くなっている点、課題点について記入してもらった。

III 結果

A 児の SST での様子の変化は、3 回目頃まではあまり積極的に他の児童とかかわりを持たなかったが、4 回目頃より他の児童に優しく声をかけたり、譲ることが増加した。一方で、自分の意見に周りから賛同が得られないなど意に沿わない事があると、落ち込み活動に参加できなくなることもあった。その際は A 児がいつでも活動に戻れるよう配慮した（‘代打’ 役を用意するなど）。指導中は、クールダウンするまで部屋から出てそばにいる指導者に自分の気持ちを話す等していたが、回を重ねるうち部屋を出て行くことがなくなり、感情を自分の中で解決しようとする様子が

見られた（例：自らお休み席に座り、数秒で「一回なら OK」と自分を励まし再度活動に参加できるなど）。

B 児は、参加当初は、単独行動が目立っていたが、7 回目頃より自分から他児や指導者に話しかけることが増えたり、他児の意見を聞いてから自分の意見を言うことや、自分の意見を譲ることができるようになった。12 回目頃からは自分の主張があるときでも、指導者の話を聞き、受け入れられる場面が増加した。A 児、B 児の変化は家庭や学校でも見られた。A 児の保護者の評価結果を、表 1、表 2 に示した。B 児の保護者の評価結果を、表 3、表 4 に示した。

表 1 A 児「指導のためのソーシャルスキル尺度」の変化

	集団行動	セルフコントロール	仲間関係	コミュニケーション
指導前	5	3	7	8
指導後	5	7	12	10

表 2 A 児 保護者の記述式アンケートにみる変化

指導中	家庭：かんしゃくを起こすことが減ってきた。 学校：友達に手を上げることが少なくなってきた。
指導後	家庭：態度、口調が穏やかになり物にあたるものが減った。 学校：授業に参加して、友達のよいところを見つけほめるようになった。

表 3 B 児「指導のためのソーシャルスキル尺度」の変化

	集団行動	セルフコントロール	仲間関係	コミュニケーション
指導前	8	7	7	7
指導後	8	11	6	6

表 4 B 児 保護者の記述式アンケートにみる変化

指導中	家庭：暴力がなくなり叫んだり癩癩が減った。 学校：他人からの刺激に過剰反応しなくなってきた。勝手にゲームのルールを変更することがなくなり負けても楽しく終われるようになった。
指導後	家庭：大声で暴れることがなくなった。 学校：暴力をふるわれてもやり返さなくなり、周りに反応せず授業に取り組めるようになった。

IV 考察

A 児、B 児ともに、SST の活動の中で回を重ねるごとに指導者や他児とのかかわりが増え、自己をコントロールしようとする場面の増加が見られた。また、保護者の評価からも SST の活動中だけでなく家庭や学校において、特にセルフコントロールについて改善が見られた。変化の要因として、①指導者が児童の気持ちを汲み取り、必要に応じて代弁や気持ちの言語化を行ったこと、②いつでも活動に戻れる場所を保障したこと、③指導者側が決めた内容だけではなく児童の要望を自主的な意見として取り入れ、他の児童の賛同を得ながら進めたことがあげられる。様々な場面で、自分が受け入れられたと感じることで、指導者や周りの児童のことも受け入れられるようになり、指導者と周りの児童から受け入れられる経験の積み重ねが、情緒面の安定につながり、家庭や学校での変化となったのではないかと考える。

(UJIIIE Kyoko)